# 金枝篇　上・中

J.G. フレーザー著　永橋卓介訳　生活社
1943-1944

文学部教授 荒木 敏夫

ローマの郊外にあるネミ湖岸には、女神のディアナを祭る聖所があり、その司祭は森の王とも呼ばれた。司祭になるためには、ネミの聖所にある、折ってはならない枝（ヤドリギ＝金枝）を折ることに成功した逃亡奴隷が、決闘を行い、司祭を殺すことができれば、その地位を襲うことができた。

フレイザーは、この不可思議な伝承の謎を解くために、40 年の歳月をかけて研究に取り組んだ。その間の成果として、『金枝篇』初版が1890年に2巻本で刊行され、その後も増補を繰り返し、1900 年には３巻本の第二版、1911 年は 11 巻本の第三版がまとめられ、さらに 1914 年に索引・文献目録、1936 年に補遺が追加され、この２巻を合わせた全13巻の決定版『金枝篇』が完成している。

『金枝篇』は、このように年をおって増補を重ねていったが、その分大部になり、研究の全容がつかみにくくなる難点も生じてきたので、1922 年には、その簡約版も出されている。

この簡約版の刊行が引き金になって、『金枝篇』は世界に読者を飛躍的に広げることができた。それは、日本も例外でなかった。

1943 年（昭和 18）、永橋卓介氏によって、『金枝篇』簡約版の上巻が、生活社から出版されている。この出版は、上・中・下全３巻を予定したが、翌年に中巻を出したものの、戦局が厳しくなってきたためか、下巻は遂に刊行されることはなかった。

戦後、『金枝篇』が出版されるのは、同じ永橋卓介訳の簡約版が、1951年（昭和26）から52年にかけてであり、岩波書店から岩波文庫全５巻で刊行されている。

現在では、簡約版を翻訳した岩波文庫本の他に、新たな簡約を試みたメアリー・ダグラス監修・サビーヌ・マコーマック編集・吉岡晶子訳『図説 金枝篇』（東京書籍、1994 年、講談社学術文庫（上下）、2011 年）が刊行され、さらに、フレイザーの著述の意図が鮮明に分かることから初版本（２巻本）を翻訳した吉川信訳『初版金枝篇』（上下、筑摩書房＜ちくま学芸文庫＞、2003年）だけでなく、決定版の全 13 巻の総てを刊行する『金枝篇』（全８巻別巻１、石塚正英 監修・神成利男訳、国書刊行会、2004 年より刊行中）もあり、『金枝篇』へのアクセスは、好環境下におかれている。

本書で展開される「未開社会」の神話・呪術・信仰の分析は、世界の各地に伝承された膨大な資料をもとにおこなわれるから、迅速なストーリー展開にならない。そのため、読み手に辛抱を要望することになる。したがって、万人に薦めても、頓挫する人の方が多いであろう。

それでも「何故、この本がそんな影響を与えたのか」の問いだけを羅針盤にして、『金枝篇』の世界に入っていく人が出てきて欲しい。

本書は、実に、世界各地に、様々なジャンルにわたって大きな影響を与えてきた。そうであるが故に、日本においては、本書の出版をめぐって小さくない波乱が生じていたと推測される。

「柳田国男が、『金枝篇』（簡約版）の翻訳・刊行に消極的であった」という「伝説」は、そうした波乱のひとつである。本書の出版が、王＝天皇（制）の理解に深く関わり、時局がら、批判にまで通じることへの不安が背景にあったのではないかとも推測されている。

それだけに、1943 年の永橋卓介氏の訳になる生活社版『金枝篇』の刊行の意義は興味深い。ついに、下巻は刊行されることがなかったのは、あからさまな出版弾圧の結果であるとは－現在のところ－断言できないが、上巻に載せた訳者永橋卓介氏の『金枝篇』刊行の意図は、恐らく出版を優先したため「奴隷」の言葉で書かざるをえなかった実情からすれば、時局の厳しさが出版を許さなくしたのではないであろうか、とも考えられる。

本書出版の反響の一端は、劇作家・評論家であった青江舜二郎氏が、フレイザー『火の起源の神話』（岩波文庫）の訳者「あとがき」で、永橋訳『金枝篇』（上巻）を 1943 年の暮れに、戦地の中国北京の本屋で目にした興奮を記していることからもうかがえる。

幸い、この生活社版『金枝篇』上・中巻は、本学図書館も所蔵している。岩波文庫版『金枝篇』全５巻と並んで、展示をしているので、是非、ご覧下さい。